

国語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、19 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読んではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問の「ア・イ・ウ・エ」のうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**「や」「など」**もそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えは解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の **○** の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 松尾芭蕉は漂泊の詩人といわれる。
- (2) 日本の伝統的な舞踊を習う。
- (3) 欧州の国々を巡る旅に出る。
- (4) 雨の滴が軒下に落ちる。
- (5) 紡績工場を見学する。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 天然ゴムはゴムノキのジュエキから作られる。
- (2) 自分に課せられたセキムを果たす。
- (3) 念願がかなってまさにシフクの境地にある。
- (4) コメコを使ってパンを作る。
- (5) ヒョウガによつてできた山域の地形を見る。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

蓮は薬師湯という銭湯で部屋を借りて、銭湯の仕事を手伝いながら大学に通っている。ある日、訪れた近隣のプラネタリウムは営業日ではなかったが、職員の計らいで試験投影を見せてもらえることになった。

「光学式のプラネタリウムは、電球の光を『恒星原板』という細かな穴の開いた板を通してドーム状の天井に映し出して星空を再現する機械なんです。もつとも、最近はプロジェクターとデジタル技術を融合させたものが主流なんで、こういった光学式は珍しいですけどね。」

「へえ……。」

感心すると、僕は無口になって「へえ。」とか「はあ。」としか返答ができなくなる。本当に感心していて頭が回ってないからなのだが、「ごめんごめん、興味なかったよね。」とか「面白くないかな？」と説明してくれている相手を白けさせることが時々ある。(1) もうちょっと気の利いた返事ができるようにならなければならないと思うのだが、なかなかできないようにならない。

「こいつが映し出せる恒星は六・五等星までで、だいたい八千個ぐらい。」

それがどれぐらい凄いのかわからず、きつと僕の頭の上には「？」がいくつも浮かんでいることだろう。

「申し訳ない。お客さんに機械に関する難しいことを言っても仕方がないよね。さあ、どこでも好きな席に座って。おーい、ダイ、試運転を兼ねて新しいプログラムをやってごらん。」

気が付けばダイさんの姿は部屋の隅にあるコントロール・パネルのよ

うな所にあった。僕は近くの席に腰を下ろした。

「気を付けて背もたれを倒してください。天井が見やすいように深く倒れる造りになってますから。」

僕はツボさんに言われた通りにゆっくりと背もたれを倒した。すると照明がすーっと消え、真っ暗になったかと思うと満天の星が現れた。

ダイさんは、マイクを通してゆっくりとした口調で星空についての解説をはじめた。声の背景に流れるBGMは、イーजीリスニングと呼ばれるジャンルだろうか。オーケストラが奏でる曲調は軽やかだけど哀愁を帯びた懐かしさがあり、アナログ式のプラネタリウムにぴったりだった。

「いかがでした？」

館内がふーっと明るくなると、驚いたことに、すぐ近くにツボさんが立っていた。慌てて背もたれを戻し、席から立ち上がった。

「あつ、ありがとうございます。すごく良かったです。」

できればもう少し気の利いた感想が言えたらなと思いつつ頭を下げた。「それは良かった。」

奥からダイさんも近づいてきた。気のせいかな、心持ち緊張しているように見える。

「どうでしたか？」

ダイさんは僕ではなくツボさんに感想を求めた。ツボさんは考え込むように顎に手をやった。(2) しばらくすると、おもむろに頷いて「合格。」と静かに答えた。

「……ほんとうですか？」

「ああ、本当だ。嘘ついてどうする？」

ダイさんはキョトンとした顔をしていたが、ゆっくりと頷くと、僕に

向き直った。

「……良かった。ねえ、蓮君、君はラッキー・ボーイかも。初めてなんだよ、初めてなんだ、私のプログラムが一切の修正なしでツボさんの合格をもらえたの！」

大喜びしていたダイさんだったが、あまりの嬉しさからだろうか涙を零し、仕舞には両手で顔を覆い隠して号泣し始めた。ツボさんは何も言わずに、じっとその様子を見守っていた。

少しすると「すみません、お客さんのいる前で……。」と詫言を入れ、ダイさんはハンカチで顔を拭いた。

「いえ、入場料を支払ってませんから、お客さん扱いをされても困ります。けど、おめでとうございます。合格する場面に居合わせるなんて、僕は幸運です。」

これにツボさんは小さく頷いた。

「よく勉強しているし、頑張っていることは前から分かってたんだ。けど、その勉強熱心なところや頑張り屋なところが、これまでのお前のプログラムには仇になっていた。ひと言で表現するなら『頭デッカチの自己満足』ってやつさ。けど、今回のプログラムは分かりやすいし、天体にあまり興味のない人でも楽しめる内容になっている。」

「ありがとうございます。……ツボさんが千本ノックをしてくれたお陰です。」

「千本ノック？」

思わず聞き返してしまった。ダイさんは照れ臭そうに笑うと教えてくれた。

「千本は大袈裟ですけど……、でも一年以上続けてますから三百本は軽く超えてると思います。ツボさん、私の練習投影に付き合ってくれてるんです、ずっと。私が怠けようとしても『おーい、そろそろやろうやー。』っ

て。辛かったけど、あのお陰で今日も途中でアドリブを利かせることができたと思うんです。」

「そこまで話すと、やっとダイさんは笑顔になった。」

「今日のアナウンス、何を考えてやってた？」

「何を考えていたか？　ですか……。」

ツボさんの問いにダイさんは少し考え込むと、ポツリ、ポツリとゆっくり答えた。

「蓮君の表情をみて、頷いたり、笑ったりしてる様子が嬉しいなあって……。」

「えっ、僕の顔、見えてたんですか？　あんな真つ暗なのに？」

思わず声が出てしまった。ダイさんは耳の横を恥ずかしそうに掻きながら頷いた。

「私たちは目が慣れてるんで投影機の灯りでお客さんの表情は十分に見えてます。」

「そうだったんですか。」

「はい。あつ、蓮君、途中で少し寝てましたよね？」

ダイさんはクスクスと笑った。

「えー、あつ、いや、寝てませんって！　いや、ちょっとウトウトしたかな。」

慌てる僕にツボさんとダイさんは声をあげて笑った。

「でも、アナウンスって、てっきり録音したものを流してると思ってました。上手ですね、ひと言も囁んだりしてなかったと思います。何度も練習するんでしょうね？」

「自分で作った台本ですから、だいたい台詞は頭に入ってるんで。でも私なんてツボさんと比べたらまだまだです。もっと声の表現力を磨いて、お客さんを自分の世界に引き込めるようにならないと。」

「確かに最近アナウンスもプロの声優さんや有名な俳優さんが吹き込んだものを流すところが増えてます。それはそれで、演技力のある人の声だから、聴きごたえもあるでしょう。けど……、やはりお客さんの反応をみて、臨機応変に語りかける内容を工夫しないと。場合によっては投影する夜空もアレンジするべきだと私は思うんです。」

ツボさんは投影機を眺めながらそう教えてくれた。

「とは言っても、ベースがしっかりしてないと、ちよつとしたアクシデントに見舞われただけで支離滅裂になってしまう。それだけにプログラムをよく考えて構成し、一言ひと言の台詞を吟味した台本作りが大切なんです。だから、ツボさんから合格がもらえたのはやっぱり嬉しい。それに……、今日のお客さんは蓮君ひとりだったからちゃんと観察できたけど、キャパ一杯にお客さんを入れたら、やっぱりテンパっちゃって柔軟に対応するなんて無理かもしれません。」

⁽³⁾ダイさんは手にしていた資料をめくりながら少し考えるような顔をした。きつとそれが台本なのだろう。

「まあ、一歩ずつさ。とりあえず、お客さんの様子をしっかりと見て、プログラムを楽しんでもらえてるかな？ 今の説明は伝わったかな？ つて心配りできるようになることが大切なんだ。お客さんのことを一番に考えられるようになれば、自ずとアドリブの加減なんかは身に付いてくるよ。」

ツボさんはダイさんの肩を軽く叩くと「さつ、微調整をして作業を終えてしまおう。今日は定時にあがってダイの合格祝いをしないと。」と声をかけた。

プラネタリウムの興奮も冷めやらぬままに薬師湯に戻った僕は、することもなかったので釜場でシゲさんの手伝いをすることにした。もっと

も、手伝いと言いながら、シゲさんに指示されるままに、在庫置き場から薪を運んでくるぐらいで大したことはできない。シゲさんは炉の加減を見ながら、火掻き棒で薪の位置を調節し湯船に張るお湯をじつくりと温めていた。

僕は作業を眺めながら、プラネタリウムでの出来事を聞いてもらった。「光学式のプラネタリウムか。ふうん、なんか俺と気が合いそうだな、そのツボさんって人。なんせ俺も、こんなバカでかい煙突をいまだに構えて、薪で湯を沸かしてる変わり者だからな。」

⁽⁴⁾自嘲するような口ぶりだけど、同志のような人の話を聞いて少し嬉しそうだ。

「確かに、今どき薪で湯船に張るお湯を沸かす銭湯も珍しいですよ。ちよつと調べてみましたけど、本当に少ないです。」

「なに、やろうと思えばカランやシャワーの湯も沸かせるんだぜ、うちの釜ならな。けど、いかんせん薪が高くなって、洗い流すような使い道の湯に使うなんて贅沢は許されなくなっちゃった。ああ、もちろん普通の銭湯みたいに湯船に張るお湯もボイラーで沸かせば、もつと楽だけど。でも、やっぱり薪で沸かした湯は柔らかいし、じつくりと体を温めるから湯冷めもし難い。かなり離れたところから、わざわざ通ってくれてる人の大半は薪で沸かした湯が目当てなんだろうしさ。期待しているお客さんがいて、オカミさんが許してくれてるあいだは、薪にこだわりたい。」

手にしていた薪をそつと焚口から中へと放り込んだ。
「しばらく釜場で大した仕事はないよ。中で脱衣所の整理でも手伝いな。」

シゲさんはじつと釜の炎に目を凝らしていた。

(上田健次「中野『薬師湯』雑記帳」による)

〔問1〕⁽¹⁾ もうちょつと気の利いた返事ができるように思

うのだが、なかなかできるようにならない。とあるが、このとき
の蓮の気持ちを説明したものと、最も適切なものを次のうち
より選べ。

ア 自分の思いをうまく表現することができないで、逆に相手を気遣わ
せてばかりの自分もどかしくなり、思い通りに相手に気持ちを伝え
られない自分にいら立つ気持ち。

イ 相手の話に同調するばかりで、これまで自分の考えを伝える努力を
してこなかったので、今後は自分の考えを積極的に発言していかな
くならないと決心する気持ち。

ウ 相手の説明を聞いているうちに、感心するあまりに理解が追い付か
なくなってしまう、結果的にあいまいな返答しかできない情けない自
分に落ち込んでしまう気持ち。

エ 本当は相手の話にきちんと反応したいのだが、自分の不器用さによ
って相手の気持ちを損ねてしまっているのではないかと、機転が利か
ない自分を反省している気持ち。

〔問2〕⁽²⁾ しばらくすると、おもむろにうなずいて「合格。」と静かに答えた。

とあるが、ツボさんがダイを「合格」と判断した具体的な理由を次
のように表現するとき、に入る語句を十五字以内で書
け。

今回のプログラムは分かりやすい内容であり、解説者のダイは

ことができていたから。

〔問3〕⁽³⁾ ダイさんは手にしていた資料をめくりながら少し考えるような

顔をした。とあるが、それはなぜか。その理由を説明したものと
して最も適切なものを次のうちより選べ。

ア ツボさんから合格をもらえて非常に喜ばしい気持ちであったが、台本の
構成を吟味してもっと良いものになりたいという気持ちが強くなって、
いてもたってもいられなくなったから。

イ 資料を構成するための基礎は理解できており、今日の新プログラム
ではツボさんから合格ももらえたが、実際に多くのお客さんの前で同
じようにできるか不安になったから。

ウ 蓮が客として新しいプログラムに付き合ってくれたので、落ち着い
て臨むことができ、ツボさんからも合格がもらえたので、蓮にお礼を
伝える適切な機会を考えていたから。

エ どんなに立派な資料を作成しても、本番で失敗してしまつては元も
子もないので、本番さながらの練習投影をして万全を期するために、
早く蓮に帰ってほしいと思ったから。

〔問4〕⁽⁴⁾ 自嘲するような口ぶりだけど、同志のような人の話を聞いて少し嬉しそうだ。とあるが、蓮はシゲさんとツボさんのどのような点を同志のようだと感じているのか。その説明として、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 薪で湯を沸かすことを大切にしているシゲさんは、自分でもそのこだわりを自負しているが、薪で沸かすお湯のまろやかさが蓮に伝わったことを嬉しく思っているという点。

イ 光学式プラネタリウムも銭湯も今や懐かしいものとなっており、自分と同じようにそれらを復興させるために旧式にこだわり続ける人のことは皆仲間と呼ぶことができるという点。

ウ 光学式プラネタリウムで星を見せ続けるツボさんと、薪で湯船の湯を沸かし続けるシゲさんは旧式にこだわりを持ち人々を喜ばせるという点で思いを共有しているという点。

エ 職人の世界は伝統技術を日々積み重ねて未来につなげていくことが大切とされているが、臨機応変に対応することの重要性もツボさんとシゲさんは理解しているという点。

〔問5〕 本文の表現の特徴や内容について説明したものとして、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 場面の変化や人物の動きが丁寧な描かれており、何気ない日常生活の中で、主人公が職人たちと触れ合いながら彼らの仕事ぶりや理念から刺激を受けていく内容になっている。

イ プラネタリウムでの出来事を詳細につづることで、主人公が光学式プラネタリウムに親しみと共感を覚え、銭湯での仕事にもこだわって取り組みたいと決意する内容になっている。

ウ 大学生の主人公と仕事に誇りを持つ職人たちとの交流が、会話を中心に描かれることにより、人物設定に対照的な印象を与え、楽観的な主人公の性格が際立つ内容になっている。

エ 職人達のこだわりの親しみやすい文体で表現されており、主人公が職人世界の厳しさのみならず素晴らしい一面も知ること、職人を目指そうと思いはじめた内容となっている。

このページには問題がありません。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

(1) 記憶には、〈宣言的記憶〉と〈非宣言的記憶〉という区別の仕方がある〔何度も繰り返していることだけれど、「記憶」とか「精神」とか「世界」のようなものは、切り口によっていくらでも違った区別や定義ができる〕。

〈宣言的記憶〉とは、「テレビとはどういうものである」という一般的な定義とはほぼ同義の〈意味記憶〉と、「昨日私は映画を観に行った」というような個人史に関わる〈エピソード記憶〉の二つを指し、〈非宣言的記憶〉とは自転車の乗り方、ピアノを弾くときの指使い、熟練工の技能といった、言葉で逐一トレースすることが難しく、またその説明を一度聞いたからといってすぐには実行できない、行為としての記憶を指している。

これらの〈非宣言的記憶〉を〈技の記憶〉と呼び、〈非宣言的記憶〉にはほかに〈条件反射〉も含まれる。また、もう一つ重要なものとして、視界の片隅などにあつて意識してはいなかったのにその後の感情や判断や連想に影響を与える、〈プライミング記憶〉という記憶の形態がある（prime＝呼び水する）。*サブリミナル効果などがこれのわかりやすい実例で、この記憶は入力時に意識されていないために当然言葉も介在せず、〈非宣言的記憶〉の範疇^{はんしゅう}に入れられる。⁽²⁾私の解釈になつてしまふけれど、人間が色や音楽の好みについて明確に説明できない原因はこの〈プライミング記憶〉によるところが大きくて、無意識とはつまりは〈プライミング記憶〉の集積であるとも言えるのではないだろうか。――それはともかく、このように、〈記憶〉とは言葉でかなり明快に伝達することが可能なものだけを指すのではない。このことは、〈記憶〉

さらには〈人間〉を考えるとときにとても重要なことだ。

たとえば青森の三内丸山古墳が見つけたときには、現代の人間は縄文人の高度な土木建築の技術に驚いた。当時の人たちは直径一メートルもあるような大木を組んで、地上一五メートルにもなるような高樓を造り上げている。彼らは図面を引かずにそういう建築物を建てた。もちろん釘やL字金具のような金属製の止め具なんかいっさい使っていない。縄文人の工法を再現しようとしたら、現代では大変な知識と技術が必要になるが、当然のことながら彼らはそれ以前の技術の自然な集積として高樓を建てた。彼らは建材として使う木が長年のあいだにその地域の気候とともにどのように変化するかを知っていただろうし、木をどの角度で組み合わせるのが一番耐久性があるのかも知っていただろう。どの部分なら切り込みを入れても強度が損なわれないかということも知っていただろう。

それらの技術や知識は当然、一世代で獲得されたわけではなくて、何世代にもわたって醸成されていった。⁽³⁾それらの技術や知識は言葉で伝えられるのではなくて、その場に居合わせることによって伝えられて、少しずつ更新されていった。^{*}「徒弟制」として今でも残っている伝達の方法だ。現在のようなマニュアル化全盛時代には、徒弟制は非常に効率が悪いとされているけれど、マニュアルによって伝えられる技術はたかが知れていて、「その場に居合わせる」という方法によってしか伝えられない部分を持つのが、〈非宣言的記憶〉の特徴で、徒弟制は無文字社会の長い歴史の中で淘汰に耐えた合理的な伝達方法だったと私は思う。そういう技術の系譜に（たぶん）属する、現存するかぎりでの一番古い建造物が法隆寺の五重塔だ。

無文字社会とは〈技の記憶〉の壮大な体系を持った社会だったのではないだろうか。その社会では技術・知識・記憶は行為者と対象との密接

な関係の中でだけ立ち現われてくるようなもので、建築する行為と切り離れた「技法の知識」というようなものはなかった。

強引な譬えであることを承知で言うのだが、その技術・知識とは、サッカーのゴールの決まった瞬間の歓喜や野球のサヨナラホームランが放物線を描いて飛んでいく瞬間の歓喜と似た、その場と密接に結びついたものだったのではないか。その歓喜は、「歓喜の記憶」として保存しておいても「歓喜」とは別のものではない。ゴールやサヨナラホームランの瞬間の歓喜は、二度と味わえないほど特別なものではなく、同質の歓喜を一シーズンに何度も味わうことができるけれど、歓喜はいつでもその場でしか起こらない（これを文学の好む「一回性」と混同しないこと）。歓喜は誰の所有物でもなく、ただその場で起こる。

無文字社会における技術・知識とは、技術者の所有物ではなく、技術者が対象に働きかけるといふ行為の中にだけあった。技術者が行為するときには必ず後継者がそれを見ていたのだから、技術を行為と切り離して言葉で伝えるなどとは思ひもなかった。チンパンジーが石を使って木の実を割る映像を見ると、子どものチンパンジーは大人がやっている横に並んで、見よう見まねでその技術を習得していく。子どものチンパンジーはまず木の実を台になる石の上に載せて叩くことを真似るが、その段階では台の石の表面は平らでなく、叩く物も石とはかきらない。子どものチンパンジーは「木の実を、台に載せ」（石か何かを）手で握りしめて叩くという目で見たプロセスだけを頼りに、台の大きさ・形・硬さ、叩く物の大きさ・形・硬さを自分の判断で選び出してゆく。この「見よう見まね」という習得の方法は、チンパンジー以来人間の中に強固に組み込まれた、かなり安定したメカニズムなのではないだろうか。

しかし文字が発明されたことで、それらの知識・技術が対象化（言

語化）して伝達される可能性が生まれた。⁽⁴⁾ つまり、人間と世界との関係が変わった。

文字とは、コンピュータと同じように独立に体系を持った厳然たるテクノロジーであって、行為の中でしか生成しなかったはずの技術や知識を、そこから切り離して保存・伝達するという意識を人間の中に芽生えさせる。この変化を、人間がどれだけ主体的に選び取ったかどうかということは問いようのない問題だ。テクノロジーとの関わりにおいては、「主体的」か「受動的」かの二分法は意味がない（ここで私は技術とテクノロジーという言葉を使い分けているが、原初的な技術でも高度なテクノロジーでも、すべて体系を持つものに対して人間は「主体的」であると同時に「受動的」に関わることでしかない。技術やテクノロジーを使いこなすということは、人間がその体系に参入するということなのだから）。

そのようにして、無文字社会から文字社会へと移行する過程で、技術や知識（それらの伝達も含めて）の大規模な喪失があったのだと思う。またそして、その移行と歩調を合わせて、技術や知識だけでなく「記憶」というものの全般の理解のされ方も変わり、言語化の難しい「非宣言的記憶」に対して言語化が容易な「宣言的記憶」（たとえば系図や『日本書紀』のように書かれた歴史のようなもの）が、社会の中で正当性を与えられるようになったのだと思う（——そしてまた、「技の記憶」にも「秘伝書」のような文字による伝達の形態が生まれたりもした……）。

《記憶》における《技の記憶》の優位は、読み書きの普及とあわせて時間をかけて消えていった。職人や伝統芸能など、《技の記憶》の優位が今でもつづいている世界があるとは言っても、社会全体のシステムや了解から見ると、それらは特殊な例であって、私たちが《記憶》と言うと

きには通常〈宣言的記憶〉の方を指す。

そしていま、私たちは〈記憶〉によって自分のアイデンティティが保証されると考えている。記憶とは一人一人の頭の中に貯蔵されているもののだから、〈自分〉を保証してくれるものとして〈記憶〉ほど確かなものはない。

しかし、それは本当だろうか。⁵⁾ 私の持っている記憶の中で「〈私〉だけしか知らない記憶」と言えるのは、〈エピソード記憶〉ぐらいしかない。〈意味記憶〉の方はいわば万人に共通の定義なのだから辞書の類いと変わらない。

しかしその〈エピソード記憶〉にしても、幼年期のものとなると親や親戚から聞かされたエピソードによって構成されていることが多い。それらは言語習得の過程で言語という既成のシステムに参入するメカニズムと似ている。私たちは人から聞かされたこともそれを記憶として貯蔵する過程で、自分が主体的に関わったことのように変形してしまっている。

厄介なのは、エピソードの主語が自分であるために、それが伝聞であることに気づきにくいということだ。つまり記憶の元となった事実はおまえは毎日庭に出ていって池の鯉を手摺みしていた」という母親の言葉だったものが、時間を経るにつれて、「私は毎日庭に出ていって池の鯉を手摺みしていた」という自分の姿（行為）に変形している。そういう記憶をここで仮に〈伝聞記憶〉と呼ぶことにするが、伝聞記憶の場合、私には自分が池まで歩いていく映像は見えているのに、池で泳いでいる鯉の映像の方は見えていない。これは逆でなければおかしい。私に見えているのは、池の鯉の方で自分の姿であるはずはない。伝聞記憶では、記憶の中の映像は語り手の視点によって構成されていて、私自身の目が見ていたはずのものは欠落している。

しかしここでもう一つ厄介なことが起こる。実際の記憶の方でもほとんどの場合、自分の姿が第三者からの視点のようにして構成されていることだ（ただし実際の記憶の場合には、それと同時に自分自身の目が見ていたものの方も残っている）。

自分が主語となっている〈エピソード記憶〉というものは、出発点において「おまえは……した」という伝聞記憶によって原型を与えられたために、第三者からの視点というフォーマットが頭の中で出来上がってしまうのではないだろうか（逆に言えば、伝聞記憶によるフォーマットが出来上がっていないければ、経験が〈エピソード記憶〉として定着しないということでもある）。

（保坂和志「世界を肯定する哲学」（一部改変）による）

〔注〕サブリミナル効果——人間の意識下に刺激を与えることで表れるとされる効果。

徒弟制——弟子が親方のもとで共に生活することを通して、商業の技術を身に付けていくという制度。

〔問1〕⁽¹⁾ 記憶には、〈宣言的記憶〉と〈非宣言的記憶〉という区別の仕方がある。とあるが、ここでの「宣言」の意味を次のように表現するとき、に入る語句を本文中の語句を用いて八字以内で書け。

〈宣言的記憶〉・〈非宣言的記憶〉の「宣言」とは、こと
という意味。

〔問2〕⁽²⁾ 私の解釈になってしまふけれど、人間が色や音楽の好みについて明確に説明できない原因はこの〈プライミング記憶〉によるところが大きくて、無意識とはつまりは〈プライミング記憶〉の集積であるとも言えるのではないだろうか。とあるが、「無意識とはつまりは〈プライミング記憶〉の集積である」とはどういうことか。その説明として、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 自分でも動機が分からないのに何かをしたくなるという現象は、以前に見たり聞いたりして理解した物事の印象が強いため、いつの間にかその影響を受けているということ。

イ 見たり聞いたりしたものをその時はしつかり気に留めたわけではないのに、後には自覚のないまま、これまで見聞きしていたものによって自分の内面が動かされるということ。

ウ 人間には見たり聞いたりして身に付いた身体的な動きや物事の考え方があり、ふとした弾みでそれらが瞬間的に起こるので、自分自身でも不思議に感じてしまうということ。

エ 過去に見たり聞いたりしたことの一部をいつまでも覚えていて、それらに類似する物事に出会ったときには、自然と先に見聞きした物との比較をする傾向があるということ。

〔問3〕⁽³⁾ それらの技術や知識は言葉で伝えられるのではなくて、その場に居合わせることによって伝えられて、少しずつ更新されていった。とあるが、「その場に居合わせる」ことによって伝えられる」ということの具体的な様子を次のように表現するとき、に入る適切な表現を、「技術者」、「後継者」という言葉と本文中の語句を用いて二十字以内で書け。

技術者と後継者がその場に居合わせて、すること。

〔問4〕⁽⁴⁾ つまり、人間と世界との関係が変わった。とあるが、どのような変化が生じたのか。その説明として、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 文字のテクノロジーが開発されて、人々が新しい体系に参入するにはそれに主体的に関わるしかなかったが、その結果従来は先人の技術に受動的に頼らざるを得なかった技術や知識の伝達が容易になった。

イ 文字が独立した体系を持つことによって、従来は記憶に基づいて行われていた技術や知識の伝達が軽視され、読み書きの習慣が浸透するにつれて、体を動かして技を身に付けようとする人はいなくなった。

ウ 文字の登場により、対象を巧みに扱うことにたけた人の実技を見聞することがなくても、適切な扱い方の技術や知識を伝授できるようになり、世の中では徒弟制よりもマニュアルが優位なものとなった。

エ 文字が発明されたことで、無文字社会では技術や知識の伝達がかえって困難になってしまい、かつての職人技を伝達するという伝統的な体系は実態がなくなって、歴史として記録されるようになった。

〔問5〕⁽⁵⁾ 私の持っている記憶の中で「〈私〉だけしか知らない記憶」と言えるのは、〈エピソード記憶〉ぐらいしかない。とあるが、幼少の頃の記憶を話す中で、筆者の言う〈エピソード記憶〉を話しているものはどれか。最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 僕の小学校は一年生が運動会の開会の言葉を言うことになっていて、僕が選ばれたんだ。言葉を考えて暗記して家でもずいぶん練習したなあ。もう今はなんて言ったか忘れてしまったけど、とにかくその時の姿は堂々として立派だったよ。

イ 富士山に登ったのは小学校一年の夏休みだったと思う。子ども用のリュックとジャケットを買ってもらったことがうれしくて家でも着ていた。リュックにはお菓子をに入れて、大人と同じ格好をして登っていた様子は得意そうだったよ。

ウ 私はちょうど小学校に入学する時に東京に引っ越してきたんだ。それまでに住んでいた所と比べると駅前がとてにぎやかで、不思議な感じがしたな。しばらくは新しい家にも慣れなくておとなしく、まるで借りてきた猫みたいだったよ。

エ 小学校一年の時、学校の体育館で学芸会の劇に出たことを覚えているよ。舞台に立ったらとても緊張したけど、客席で手を振って応援している家族の姿を見たとき、気持ちが高揚になってせりふが出てきて終わった時はいい気分だったよ。

〔問6〕 この文章を学習した生徒たちが次のように話をしている。筆者の考えを踏まえたうえで、生徒Aから生徒Eの会話も参考にして、あなたは人間にとって大切な記憶とはどのような記憶だと考えるか。具体的な自分の経験をもとにして、あなたの考えを二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

生徒A 人間にはいろいろな記憶があるんだね。たとえば自転車に乗れなかったのが乗れるようになると、自転車に乗ることを体が覚えるということも記憶なんだね。

生徒B でも、どうしても記憶というと何かを頭で覚えていることだと考えてしまうよ。

生徒C そうそう。単語とか漢字とか、数学の公式や歴史上の人物も。勉強に関することは記憶するものが多いね。

生徒D でも今はパソコンやスマートフォンなどは人間がはるかに及ばない量を記憶することができるよ。動画だって保存できるから、何かのやり方を伝えていくつてこともできるよね。

生徒E 動画で自分の幼少の頃の姿も確認できるもんね。そうすると私の記憶ってどんな意味があるんだろう。人間はもう自分の記憶に頼らなくてもいい時代がくるのかな。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお、 内の文章は現代語訳である。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

建築空間の出現の度合いで、まず注目されるのが、「御車、車」の多いことである。実際『枕草子』には車の話が多く、後宮の女性がかかるときには車が欠かせない乗り物となっており、車に関する趣味のよしあしを論じた部分が多いことを示している。次に多いのが、「宮」「殿」などの用語であるが、これはほとんどが人物を表している。また「御簾・簾」「御几帳・几帳」「御屏風・屏風」など建築内部の建具、家具が多いのが、『万葉集』などと大いに異なる点である。

『枕草子』の都市空間は、完全に建築の内部に移ったと言える。

『万葉集』において多く見られた「宮」や「殿」はここでは人物を指すようになっており、時代の変化が感じられるが、「宮」はたいていは中宮定子、「殿」は多く関白道隆を指している。貴人を指すのに建築空間を用いるのはこの時代の常識で、『源氏物語』にもこの傾向が強く、そのためにわれわれにはそれが誰を指すのか分かりにくくなっている。⁽¹⁾位の高い人物の名を直接口に出すのは不吉で、はばかられるという、中国的、日本的な感性によるもので、これは後世の、^{*}院、^{*}御館様、^{*}北の政所、^{*}奥様、などの表現につながり、空間によって、そこにいる人物を表現するという文化の一つの型となっている。

⁽²⁾『万葉集』の建築空間が、外部、それも「遠望の空間」に偏っており、『古今和歌集』『新古今和歌集』も、身近な空間とはいえず、家の前の花鳥風月の情景という外部空間が多かったのに対して、ここでは建築の内部空間が圧倒的である。「車」が多いというのも、それは言ってみれば「移動する内部空間」であることを意味している。

〔二〇段〕「清涼殿の丑寅の角の、北のへだてなる御障子は、^{*}荒海の絵。生きたるものどものおそろしげなる、^{*}手長・足長などをぞ描きたる。上の御局の戸をおしあげたれば、つねに目に見ゆるを、憎みなどして、笑ふ。」

^{*}高欄のもとに、青き瓶の大きなを据ゑて、桜のいみじうおもしろき枝の、五尺ばかりなるをいと多く挿したれば、高欄の外まで咲きこぼれたる昼つ方、大納言殿、^{*}桜の直衣のすこしなよらかなるに、濃き紫の固文の指貫、白き御衣ども、うへには濃き綾のいとあざやかなるを出だしてまゐりたまへるに、主上のこなたにおはしませば、戸口の前なる細き板敷にゐたまひて、ものなど申したまふ。

御簾のうちに、女房、^{*}桜の唐衣どもくつろかに脱ぎ垂れて、^{*}藤・山吹など、いろいろ好ましくあまた、^{*}小半部の御簾よりもおし出でたるほど、^{*}昼の御座のかたには、御膳まゐる足音たかし。」

清涼殿の丑寅の角の御障子は、荒海の絵やおそろしい生きものなどを描いて、上の御局の戸を上げるといつも見えるので憎みながらも笑いあう。

高欄のもとに青い瓶の大きなを据ゑて、桜の面白い枝をたくさん挿し、高欄の外まで咲きこぼれた昼に、大納言殿、桜の直衣のなよらかなのに、濃い紫の固文の指貫、白い御衣、その上には濃い綾のあざやかなのを着て現れる。主上はこちらで、戸口の前の細い板敷にいて中宮様と御話をする。

御簾のうちに、女房達が桜の唐衣などをゆつたりと垂れて、藤・山吹など、それぞれの好みで小半部の御簾より出し、天皇の常の御座所には蔵人などの足音が高い。

ここで「主上」は一条天皇、大納言は定子の兄伊周を指している。これは天皇、中宮、大納言が、ある空間に登場するさまを描写して、その美しさをたたえている部分である。その道具立てに極めて多くの建築の部分、御障子、戸、高欄、戸口、板敷、御簾、小半部、御座、などが使われており、そういった舞台道具とともに登場する人物の、振る舞いの見事さが、「なよらか」「あざやか」などの言葉で表現されている。

これはまた絢爛たる空間である。これまで見てきた和歌文学にはない色彩を感じるのは、「桜の直衣、濃き紫の固文の指貫、白き御衣、濃き綾のいとあざやかなる、桜の唐衣、藤・山吹など」という衣装の説明のせいであろう。桜や藤といった花は、それこそ和歌集にはふんだんに登場するのであるが、それはあくまで自然の色彩であって、こういった宮中の人工的な内部空間における衣装や建具の色彩とは、受ける感覚が違うのである。

(3)『枕草子』によって我々は、平安京の宮中という、まったく人工的な、はなやいだ都市空間に連れていかれる。

〔九九段〕「殿・上、曉に、一つ御車にてまゐりたまひにけり。

早朝、いと疾く御格子まゐりわたして、宮は、御曹司の南に、

四尺の屏風、西東に御座敷きて、北向きに立てて、御畳の上に

御茵ばかり置きて、御火桶まゐれり。御屏風の南、御帳の前に、

女房いと多くさぶらふ。

まだこなたにて、御髪などまゐるほど、『淑景舎は、見たてまつりたりや』と、問はせたまへば、『まだ、いかでか。御車寄せの日、ただ御うしろばかりをなむ、はつかに』ときこゆれば、『その、柱と屏風とのもとに寄りて、わがうしろより、みそかに見よ。いとをかしげなる君ぞ』とのたまはするに、嬉しく、ゆかしさまさりて、『いつしか』と思ふ。

関白殿と北の方は明け方に同じ車でやって来た。

朝早く御格子を上げて、中宮は御曹司の南に、四尺の屏風、西東に御座を敷いて、北向きに立てて、御畳の上に御茵を置いて、御火桶をさしあげる。御屏風の南、御帳の前に、女房が多くいる。

中宮様がまだこちらで髪の手入れをしている時に、『淑景舎は、もう見ましたか』と聞くので、『まだ、御車寄せの日に後ろ姿だけをちょっと』と申し上げると、『その柱と屏風とのもとで、私の後からこっそり見なさい、とてもきれいな人ですよ』と言って下さるので、うれしくて早く来ないかなと思う。

(4)これは淑景舎（桐壺）に住む、東宮の妃となる関白道隆の娘、つまり定子の妹が来るのでその様子を見ようという話で、淑景舎、中宮

定子、関白道隆、および清少納言本人の姿が描かれている。ここでは、格子、屏風、畳、柱、などがよく描かれており、女性らしくこまやかな観察眼が発揮されている。

『枕草子』はほとんどが、宮廷内部の、人物の振る舞いを描いている。人物とは天皇、中宮、関白、その他の公達、女官、僧などで、その振る舞いをほめたりけなしたりしているのである。「なによりも人のふるまひ、心のよしあしのただずまひを教へたるものなり」という教養書的な受け取り方が普通のようなだが、私は、これは全く個人的な、趣味的美学の書であると考ええる。

そこに登場する人物は、あたかも舞台の上で演技する役者のように、その日常の立ち居振る舞いを審美され裁断されているのである。これは、宮廷という劇場における、人間の交遊の様を、あたかも劇を見るように描いているのであり、一つ一つの建築空間はその舞台となっている。こ

の時代の宮廷は、人と人との演技の相互鑑賞の場であり、その演技の場面に、儀式があり、祭りがあり、季節の行事があり、花鳥風月という文化があったのである。多くの棟が渡り廊下でつながったこの時代の寝殿造りは、一つの街のような空間の複層性をもち、特に、内裏という、閉ざされた巨大な建築の複合世界は、様々な種類の殿上人たちが交遊する一つの都市空間といってもよいようなものであった。⁽⁵⁾『枕草子』は言ってみれば、平安王朝という「劇場都市」の演技指導の書でもあったのだ。

劇場では「観る」ということが生命である。『枕草子』においても人が人を観る、人が花鳥風月を観るという場面が極めて多く、その観たさまが、美しく、立派で、風情があるというのが「をかし」という評価になるのである。その観るため、あるいは隠すための道具立てが「御簾・簾」「御几帳・几帳」「御屏風・屏風」「御障子・障子」であり、こういった視線を調節する建具、家具が、この劇場ではちょうど舞台の「幕」の役割を果しているのである。

(若山滋「文学の中の都市と建築」(一部改変)による)

〔注〕御簾——貴人の部屋のすだれの敬称。

御几帳——垂らした布で貴人の部屋を隔てたり目隠ししたりすること用いた調度品。

院——上皇や天皇の母に対する敬称。

御館様——身分の高い人や相手を敬って用いる敬称。

北の政所——摂政・関白の正妻の敬称。「北の方」とも言う。

清涼殿——平安京における天皇の日常の居所。

丑寅——北東の方角。

手長・足長——中国古代の想像上の生物。

上の御局——天皇の居室に近いところにある部屋。

高欄——御殿の外回りにめぐらしてある手すり。

桜の直衣——表は白、裏は赤または紫色の男性の日常服。

固文の指貫——固く織った布で作ったはかま。

桜の唐衣——表は白、裏は赤または紫色の女性の衣装。

藤・山吹など——ここでは女性の衣装の色のこと。

小半蔀——上部を外側に釣り上げて開ける、上下二枚に分か

れた戸。

昼の御座——清涼殿内にある昼間の天皇の居所。

御曹司——ここでは中宮の部屋。

御座——貴人が座ったり寝たりする敷物の敬称。

御茵——貴人が座る時に畳の上に敷く敷物。

御車寄せの日——淑景舎に住む妃が車で宮中へやってきた日。

公達——上級貴族の息子。

〔問1〕⁽¹⁾ 位の高い人物の名を直接口に出すのは不吉で、はばかれると

あるが、その説明として、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 高貴な人の名をそのまま言い表すと悪いことが起きてしまうのではないかと思われる、自然と遠慮してしまうということ。

イ 高貴な人の名を声に出すことは周りにその人の名前を知らせることになるので、むやみに呼ぶことを控えるということ。

ウ 高貴な人の名について話すことは恐ろしいという考えに基づき、人々は極力話にすることを避けて嫌っているということ。

エ 高貴な人の名を話題にすることで話題にした人間の貪欲な感性が出てしまうことを心配して、気が引けてしまうということ。

〔問2〕⁽²⁾ 『万葉集』の建築空間が、外部、それも「遠望の空間」に偏って

おり、『古今和歌集』『新古今和歌集』も、身近な空間とはいえ、家の前の花鳥風月の情景という外部空間が多かったのに対して、ここでは建築の内部空間が圧倒的である。とあるが、『枕草子』における「建築の内部空間」とはどのようなものだと作者は考えているのか、その説明として、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 人々が、はなやかな交際の一方でくつろいだ生活を送ることを意識した空間であり、他人の目を気にしないように建具を配置して個人の居場所にするもの。

イ 人々が、離れたところにいる人に見られることを意識して行動する空間であり、離れていても好ましく見えるように多くの装飾を家具に施したもの。

ウ 人々が、互いに見ること、見られることを意識して行動する空間であり、建具や家具で他人の注目を集めたり遮ったりする工夫を行っているもの。

エ 人々が、部屋に居ながらにして美しい自然を見ることを意識した空間であり、外に出なくても優雅に風情を楽しむことができるように配慮したもの。

〔問3〕『枕草子』によって我々は、平安京の宮中という、まったく人

工的な、はなやいだ都市空間に連れていかれる。とは、どういうことか。その説明として、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 平安京の宮中は、室内の道具が役者と見立てられた貴族を美しく引き立てる働きをしている場であり、私たちは『枕草子』を読むことで宮廷を劇場として考えた貴族の想像力に感心することになるということ。

イ 平安京の宮中は、自然の色とは印象が異なる色彩を実現させた衣装や建具とともに多くの貴族が生活をしている場であり、私たちは『枕草子』を読むことで宮中の空間のはなやかさを知ることになるということ。

ウ 平安京の宮中は、優雅な貴族社会を作り上げるために人々が空間を花や衣装で飾り立てている場であり、私たちは『枕草子』を読むことで人々が風流を重視していることを改めて認識することになるということ。

エ 平安京の宮中は、身分の高い貴族たちが豪華な建築物を作り上げているはなやかさを競い合っている場であり、私たちは『枕草子』を読むことで登場人物それぞれの立場や相互の関係に気付くことになるということ。

〔問4〕⁽⁴⁾ これは淑景舎（桐壺）に住む、東宮の妃となる関白道隆の娘、

つまり定子の妹が来るのでその様子を見ようという話で、淑景舎、中宮定子、関白道隆、および清少納言本人の姿が描かれている。

とあるが、この場面の清少納言について次のように表現した時、
A B に入る最も適切な語句を、A は
九字、B は十五字で本文の古文の箇所から抜き出して

書け。

中宮定子に仕えている清少納言は、定子の妹について、これまでは

A を見た程度だったので、この日は定子から建具のそばで

B と言われて楽しみにしている。

〔問5〕『枕草子』⁽⁵⁾は言ってみれば、平安王朝という「劇場都市」の演技指導の書でもあったのだ。とあるが、『枕草子』についての筆者の考えを説明したものととして、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 平安王朝において、貴族には多くの棟がある複層的な建築空間に応じた服装や行動が必要だった。そこで複雑な都市空間での作法を清少納言が深い教養から合理的に解説したものが『枕草子』である。

イ 平安王朝において、清少納言は多くの貴族の様子を観察している。その際に目に留まった気になる点を直接本人に伝えて助言するために清少納言が自発的に記録として残したものが『枕草子』である。

ウ 平安王朝において、位の高い貴族は身分に適した所作が求められた。しかし明文化されていく互いに批評し合うだけだったので、中宮定子の命で清少納言が教訓的に示したものが『枕草子』である。

エ 平安王朝において、貴族が交流する宮中では人々はお互いに日常の動作を観察しながら判定し合っている。その中で、適切な身のこなし方について清少納言が感覚的に論じたものが『枕草子』である。

7
|
青

園

五
日